

日本図の変遷  
～赤水から伊能～  
小野寺淳 平井松午

...23

された黄道憲事件が勃発した。この事件は、酒井兄弟の人生に大きな変化をもたらす。木村課長の部下、渋谷信夫は刑務所で自決した。木下圭寛も参謀本部を辞し、大阪市に転居して宗益寛と改姓した。高藤敏夫氏によれば、次男喜雄も製図塾の経営を辞めたことである。

内務省勸業局に勤務した五男捨彦は、参謀本部の武士名を捨て、官を辞す。平民となった捨彦は生活のため、日本橋の書肆小林喜右衛門より、七十九年から画工結城正明による銅板の国図を刊行した。これら国図は九九年三月の府県制改正の前年まで刊行され続けた。官製の地形図とは異なり、府県制改正まで旧国単位の国図の需要が民間で高かったことがわかる。

また捨彦は「新撰製図全国」「大日本全国」などを小林喜右衛門(仙鶴堂)より刊行。「新撰製図」は英国で発行された地形図を原書として、「校用日本新図」や「校用万国新図」は小林喜右衛門・柳原友吉から刊行した。これら教科用図に転載された日本図は、伊能図をもとにしたと考えられる。

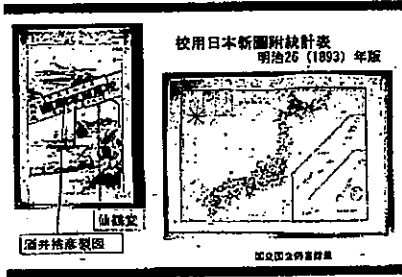
孟寛もまた九四年四月十一日(十七日)に訂正貼紙ありの「教科用万国新図」を發行し、教科用図の製作にかかわる。酒井捨彦作図「校用日本新図」は少なくとも二十版、宗

明治期地図帳に掲載された日本図

代地図製作へと移行する。

ところが八一年、参謀局地図課木村信卿課長らが清国の黄道憲へ地図を売り渡したとする。後に明治のシーボルト事件と称

明治になって、旧水戸藩士酒井喜熙の息子たちはいずれも地図製作者への道を歩むこととなる。長男は夭折したが、次男喜雄は東京に出て時習義塾という製図の専門学校を経営した。三男木下孟寛は陸軍参謀本部勤務、四男渋谷信夫は陸軍参謀局地図課に勤務した。五男酒井喜貞は一八七〇(明治三)年に「校正陸奥分国三州全図」を作製し、水戸の書肆(出版業者)須原屋安次郎から出版した。この図文(あとがき)には、伊能図の曲尺(長さの単位)六分を一里(中図)として製図したと記されている。早くも伊能図が活用されており、七二年末(一八八〇)から陸軍参謀本部で測量が始まるなど、近代地図製作へと移行する。



表紙に「酒井捨彦製図」と記載された校用日本新図統計表 明治26(1893)年版 (国立国会図書館蔵)

孟寛作図「教科用万国新図」も少なくとも十九版を推認できる。文部省の国定教科書検定制度が施行される以前の教科用図帳は酒井兄弟、すなわち横山大観の父と伯父が深く関わっていたのである。

おのでもら・あつし  
放送大茨城学習センター  
所長

おわり